

## 貨幣錯覚、流通速度とケインジアン・モデル及びマネタリスト・モデル

同志社大学 藤原秀夫

ケインジアンとマネタリストとりわけミルトン・フリードマンのマクロ経済モデルをベースとした理論的論争は、インフレの時代であった1970年代から80年代前半に華々しく展開され、デysinフレの過程で、収束していった。その際、ケインジアンサイドからマネタリストの主張する幾つかの理論的命題（貨幣数量説や貨幣の中立性が成立するのは長期均衡においてであるとか、短期に自然失業率以上に雇用率を引き上げるケインズ政策を採用しても、長期には自然失業率の水準が実現するとか、である）を証明するマクロ・モデルが構築されたが、その出発点となった論争は、単純な所得・支出モデルにおける「欠けた方程式」をいかに補うかを論点とする論争であったことは周知のことであった。その後のケインジアンサイドの「マネタリスト・モデル」は、この出発点となった論争を本当に解決したのであるだろうか。フリードマンは、2006年にこの世を去ったが、彼の残した論争には、マクロ経済理論の認識を根本的に深化させるものはなにもないのであるだろうか。本報告は、このような疑問に一つの解答を与えることを目的としている。

理論的論争の出発点になった「欠けた方程式」に関する論争は、二つの点で、過度の単純化であったことは明白である。一つは、たとえ単純なモデルであっても、ケインズ以降の論争では財政的要素を含まなければならないという点である。もう一つは、ケインズ自身も（新）古典派との論争では、家計の労働供給関数は拒否するが、企業部門の利潤最大化による労働需要関数は認めたように、何らかの形で、サプライサイドの最低限の定式化は必須であるという点である。これらの点を修正して、「欠けた方程式」論争を再現することは容易である。ケインジアンサイドの「マネタリスト・モデル」は、いずれもこの二つの点を取り上げ、とりわけ後者の問題を、「マクロ供給関数」と位置づけて、貨幣賃金率の内生化を試みて、「マネタリスト・モデル」を構築し、マネタリストの理論的命題を証明した。ケインジアンアプローチは、「マクロ供給関数」アプローチとでも呼ぶべきものであって、労働供給関数を仮定し、労働市場の均衡条件を取り上げようが、修正フィリップス曲線を結合して、貨幣賃金率を内生化しようが、インフレ予想を含んだマクロ供給関数を定式化する限り、この「マネタリスト・モデル」は、ほぼ同じ結論に到達する。

フリードマンは、流通速度（関数）に強くこだわりをもった。「マクロ供給関数」アプローチによる「マネタリスト・モデル」では、流通速度は「マネタリスト・モデル」の体系外にあって常に成立している数量方程式によって決定される。このモデルでは、ワルラス法則が成立しているとするならば、この貨幣市場の均衡条件と数量方程式は、根本的に異なる要素である。「マクロ供給関数」アプローチと、流通速度関数を独立に定式化し、数量方程式で物価を決定しようとする「流通速度アプローチ」とは両立しない。均衡マクロ経済モデルにおいて、後者のアプローチの可能性を理論的に成立させるのは、どの経済主体が貨幣錯覚にあるかという条件次第である。すべての経済主体が貨幣錯覚であるならば、モデルは名目表示のモデルとなり、数量方程式で物価を決定することはできない。

これまでの論争は、すべて貨幣供給（増加率）のコントロールが前提となっているが、デysinフレやデフレの過程では、利子率政策が重要となっている。この政策の採用のもとでは、上記の論争はどのようになるかを、最後に展望することにする。